

## 研究・調査報告書

分類番号	報告書番号	担当
A-110	13-066	滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学部門
<b>題名 (原題/訳)</b>		
Alcohol and trauma—in every age group. すべての年齢集団におけるアルコールと傷害		
<b>執筆者</b>		
Kowalenko T, Burgess B, Szpunar SM, Irvin-Babcock CB.		
<b>掲載誌</b>		
Am J Emerg Med. 2013 Apr;31(4):705-9. doi: 10.1016/j.ajem.2012.12.032. Epub 2013 Feb 4.		
<b>キーワード</b>		<b>PMID</b>
アルコール陽性反応、傷害、アルコール重症度得点、死亡率		23380101
<b>要 旨</b>		
<p><b>目的：</b> あらゆる年齢層におけるアルコール陽性反応 (AlcPos) を示した傷患者の割合と、全国傷害データベース (NTBD) 調査における死亡率との関連を検証する。</p> <p><b>方法：</b> MS Access 2007 を使用して全国傷害データベース (NTBD:バージョン 6.2) から以下の変数を抜粋した：年齢、アルコール依存、傷害の重症度スコア (ISS)、退院状態 (生存退院か死亡退院か)。ロジスティック回帰のための年齢階級は、0～10 歳、11～20 歳、21～39 歳、40～64 歳、64 歳以上と定義した。</p> <p><b>結果：</b> 全傷害生存者のうちで約 47% (合計 1,311,137 のうちの 621,174) に対してアルコールテストを行い、28% (176,107/621,174) がアルコール陽性反応を示した。アルコール陽性反応者の割合は 22 歳まで徐々に増加し、22 歳で最も多く 46% (6797/14,732) に達した。アルコール陽性反応者の割合は 22 歳以降は減少し 50 歳で 35%、さらに 66～70 歳までに 15% (2516/16244) に徐々に減少した。傷害の重症度スコア (ISS) は全ての年齢層でアルコール陽性反応の患者で有意に高かった (<math>p &lt; 0.01</math>)。死亡率はアルコール陽性反応の子ども (20 歳まで) と 40 歳以上の成人で有意に高かった。21～39 歳のアルコール陽性反応者はアルコール陰性者と比較し死亡率は低かった。ロジスティック回帰分析 (傷害の重症度スコア ISS で調整) の結果により、アルコール陽性反応者の死亡率が低い 21～39 歳ではアルコール陽性反応の死亡率が高い 40～64 歳と 65 歳以上とはアルコール陽性反応が全く別の役割を示していることがわかった。</p> <p><b>結論：</b> すべての年齢の傷患者はアルコール陽性反応者である可能性が大きい。アルコール陽性反応は全ての年齢層において症状の重い傷害であることに対する指標である。傷害の重症度スコア ISS 調整後、40 歳以上の傷患者でアルコール陽性反応者の死亡率が増大した。この研究は全ての年齢層でアルコールテストが役立つことを示唆している。</p>		